

みんなにやさしい、特別支援教育 (12)

2階の廊下を歩いていると、I先生の元気な声が聞こえてきます。続いて、子ども達の元気な声と笑い声が聞こえてきました。ギャングエイジと呼ばれる3～4年生の子ども達は実に元気です。そんな子ども達に負けないようにと、先生も元気に頑張っておられます。

社会の時間のことです。スーパーマーケットにたくさんのお客さんが来る秘密を子ども達に考えさそうと、「秘密を10個書こうか」との指示がありました。すかさず、子ども達は、「ええ～」「無理」「2個」「1個」などと、好き勝手なことを言っています。そんな子ども達に、先生も負けてはいませんね。先生の反撃開始です。子ども達は、先生の「すごいやん」「いっぱい書いたやん」「裏まで書いてるやん」といった言葉にのせられて、いつの間にか10個以上も見つけてしまっているのです。



言葉に抑揚をつけながら先生自身の失敗談などをおりまぜて表情豊かに話されていることは、いつの間にか子ども達も引き込まれていっているのですね。

小学校の授業は、答えを教えるのではなく、発問によって答えに子どもたちを導くものです。中学、高校のような先生が説明しっぱなしの授業ではなく、子どもたちに発問をして、正解の方へ教師が導いていくものなのです。場合によっては、先生がわざと間違えて子どもたちに訂正させたりもします。先生と子どもたちとのやり取りの中で子どもたち自身が答えを見つけるのが小学校の授業なのです。

先生が身振り手振り、話し方をオーバーにすると、子どもたちは、授業に引き込まれていくのです。つまり、授業の中で、役者として教師を演じるのですね。

先生の発問に対して、子どもたちが発言する。

その子どもたちの発言に対して、先生が大きなジェスチャーで嬉しそうにクラス全体に広げてあげる。先生が嬉しそうな様子を見せると、発言した子どもは嬉しくなってまた発言しようとする。

先生の大きなジェスチャーや嬉しそうな様子を見ていた子どもたちも、今度は自分が発言して先生に大きなジェスチャーや嬉しそうな様子をしてもらおうと、頑張って発言しだすのです。その繰り返しで授業が盛り上がっていく。そうすると、必然的にみんなが授業に引き込まれて行くのです。

昔から「教師は五者たれ」と言われています。すなわち教師は、「学者たれ、医者たれ、易者たれ、役者たれ、行者たれ」ということです。誠に言い得て妙な言葉であり、私たち教師はこうありたいものだということを実感させられます。

1. 学者たれ

教科指導に精通して、授業に勝負をかけるということでしょう。小学校でも中学校でも、子どもは教師の持っている専門性に触れることにより感動し、心が開かれるのです。

2. 医者たれ

子どもの心と体の健康を診断し、処方を持心得ていることでしょう。子どもが困った時に何でも相談できる位置に教師がいることが大切なのです。そのことにより子どもは安心するのです。

3. 易者たれ

「大丈夫、君ならできる」「君のここが凄い」など、子どもを認め励ますことを心得ていることでしょう。教師の一言が、子どものやる気を促し、動機づけの要因になるのです。

4. 役者たれ

語りかけることにより、心を揺さぶり、説得することを心得ているということでしょう。一時間の授業は一つのドラマと同じです。教師の創意や豊かな発想、巧みな口調、豊かな表情などで、子どもは授業にのめり込んでいくのです。

5. 行者たれ

率先垂範、不言実行（有言実行でも）、子どもが常に教師の後ろ姿を見ていることを自覚し、子どものあこがれる大人像を教師が体現していかなければならない、ということでしょう。